

追手門学院大学  
心理学論集第29号抜刷  
2021年3月31日発行

原 著

不登校時に通っていた場所に対する意味づけ

松 原 遼 太

(追手門学院大学)

Meaningfulness on attending the place during  
being school refusal

Ryota Matsubara

(*Otemon Gakuin University*)

## 不登校時に通っていた場所に対する意味づけ

松 原 遼 太

(追手門学院大学)

### Meaningfulness on attending the place during being school refusal

Ryota Matsubara

(Otemon Gakuin University)

#### 問 題

##### 不登校の背景

昨今の教育領域において注目されている不登校は、文部科学省主導で長きにわたって調査が進められている。文部科学省(2019)の不登校者数に関する調査では、小学校の不登校を理由とした長期欠席者数は44,841人、中学校では119,687人となっており、前年度調査結果と比較すると14.2%増加している。さらに高校生では、不登校者数は52,723人で前年度から6.2%増加していることを示している。不登校の現状に関する認識として、不登校の要因やその背景は特定することが難しく特定できないこともあることを留意しておくことが重要となる。そのため不登校児童生徒の対応を行う際には、その個人にあわせた固有のアプローチを行うことが求められる。

前述したように不登校の要因、背景は個人によってそのきっかけも種々様々なものである。文部科学省(2019)の調査では「不安傾向」が高い児童は家庭状況、友人関係の問題が目立ち、「無気力傾向」が強い児童は家庭状況、学業不振が多く見られた。さらに学校における人間関係の問題を抱えている児童の存在が示された。また「あそび・非行傾向」が強い児童には家庭状況の問題、学業不振が多く見られた。高校生の不登校要因について、文部科学省(2019)の同研究では「無気力傾向」が強い生徒には学業不振、「入学、転編入学、進級時の不適応」が見られることが多く「学校における人間関係」に

課題を抱えている生徒には友人関係の問題、不安傾向が強い生徒には進路、学業不振への不安が、「あそび・非行傾向」がある生徒には学校のきまり等をめぐる問題が多く見られるとした。また、大学生の不登校の要因について研究を行った松高(2016)は、不本意入学、学習意欲の低下、就職活動などのアイデンティティに関わる問題を要因として挙げた。さらに小柴・谷口(2013)の研究によると、「親子の関係」は大きな要因の一つとなりうるとした。母親との不適切な関係性や疎遠な父子関係、対象喪失体験によって情緒発達の健全な促進が妨げられることで、その子どもは心身共に未熟で自己肯定感が低くなってしまふことを示した。それに加えて対人関係等から過剰なストレスを受けることで頭痛、腹痛等の身体症状を訴えた後に不登校へと至る、と唱えている。対人関係と不登校について研究を進めていた高橋(2001)は、「登校適応群」、「登校不適応群」、「不登校群」の3群を比較し、「登校適応群」は友人関係において自分に自信があり友人と積極的に関わろうとする傾向があるとし、「登校不適応群」は自分に自信がなく自分から相手に対して積極的に関わることが難しい傾向があると推測した。さらに「不登校群」は「関係参加行動」、「関係維持行動」、「主張性スキル」の低さを示し、他者と適切な関係を築くことが困難であるとした。

また、適応と不登校の関係について、半田(1999)は、「不登校の生徒と話していると、何人かの生徒が『本当の自分』あるいは『嘘の自分』といった言葉で、自分のあり方を表現するのに出会っ

てきた。例えば、『クラスではうその自分なんだけど、部活に行くと本当の自分になれる』などである」と述べている。学校におけるクラスは学校生活において最も多くの時間を共にする。その中で偽りの自分を演じるということは過度の適応から不適応（不登校等）に繋がってしまう可能性があることを示唆している。

上記の要因に加えて近年では発達障害も要因の一つとして考えられている。鈴木ら（2017）の研究では広汎性発達障害（PDD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）などを要因とする事例の存在を示している。

これらの先行研究から、不登校の要因と考えられるものは多岐にわたることが推測できるだろう。

### 不登校の意義

不登校の意義を考えるうえで外せない考え方があられる。それは「内閉論」である。その根本的な考え方として、山中（2000）は不登校状態である児童生徒の状態を「『サナギ』の時期」とし、この時期には、彼ら彼女らになるべく早く学校へ復帰させようとするのではなく、「アイデンティティを形成するまでもっぱらこの状況を守ること」であるとし、そうすることでいずれ脱皮の時期が訪れると述べている。さらにその中で没頭している他愛もない趣味について、それを「僅かに開いた窓」とし、その「窓」を通して世界とつながりを持っているとした。つまり不登校には、サナギの状態である時に実際のサナギのように自己を一度ドロドロに溶かし、その殻の中でアイデンティティを形成するという形で再凝縮させる面と、繭のなかで自身を守りつつ窓を通して外界と関わることで、閉じながらも成長を続け、後に繭を破り外へ飛び出すための準備段階であるという二つの側面があると考えられる。

また「不登校」と一言でいうと、世間一般的にはマイナスのイメージを想起させ得るものである。実際に文殊・日高（1996）はそのイメージは概してネガティブであることを報告している。しかし、不登校にはマイナス面だけではなく、その人の人生において必要となりうる側面も存在していることを示している研究もある。高橋（2010）の研究では、3名の研究協力者のうち3名全員が肯定的な意味付けをしており、内容としてはフリースクールや適応指導教室などで「自分の居場所を見つけること」、「友人と関係を深めること」が過去の不登校経験への肯定的意味付けに影響し得る可能性を示唆している。即

ち、不登校経験者にとって「不登校」となることで得られた居場所や、そこでの経験がその後の人生におけるターニングポイントとなることが考えられるのだ。

### 居場所の考え方

居場所の定義は研究者によって様々なものが用いられている。忠井・本間（2006）は居場所の定義を「その人がなすべき行為や活動ではなく、存在そのものがその場に無理なく定位できるという存在論的な次元に関わるもの」としている。さらに「場」に通う、いられる基本的な条件はその場で自らの存在が脅かされることなく安心していられること、換言すれば存在自体の価値がまるごと認められることが居場所づくりの根幹になければならないと述べている。即ち、否定されないということである。「否定されない」とはつまり、自分がただその場にいられると実感できるということである。肯定する以前に否定しないことが彼らとかわるうえで重要であることは言うまでもない（忠井・本間，2006）。臨床心理学研究における居場所の定義に言及した石本（2010）は、「ありのままにいられる」と「役に立っていると思える」ことの2つの感覚が居場所の中心にあると述べている。後者の「役に立っていると思える」ということはその居場所の中で何らかの役割を持っていると解釈できる。つまり自身が必要とされていると感じられることが重要であると換言できるのではないだろうか。

居場所や交友関係を踏まえて、三浦（2009）は、日常生活において、「友達が慰めたり励ましてくれた、相談に乗ってくれた」等の友人とのかかわりや、「先生から頼りにされた、褒められた」等の教師とのかかわりを含む肯定的出来事を経験している生徒はストレス反応や不登校感情が低く、自尊感情は高くなる傾向があるとしている。即ち、人から頼られること（認められること）で自己肯定感や自尊感情が高まると考えられ、「不登校」を考えるにあたって、その人の交友関係、対人関係や受け入れられる関係が内包されている場所及び居場所は重要なものとなりうるかと推測できる。

### 「居場所」の多様化

昨今、「居場所」というものは幅が広がりつつある。田村（2016）は1980年代のフリースクール、フリースペースなどの取り組みを皮切りに様々な「居場所づくり」が実践されてきたと述べている。佐川

(2010)はフリースクールでの不登校支援で、広く共通して重視されるのが、子どもとの「対等性」と子どもに対する「受容と共感」の姿勢であるとしている。また、「対等性」について「居場所」の全国研究を行った菊池・永田(2001)は、「多くのフリースクールやフリースペースなどの民間の居場所では、学校にみられる教師と生徒の関係性が排除されている」という点を指摘している。対等な関係で接していくことで子どもの安心感を促進しうるのでないかと考えられる。安心を喚起する上で佐川(2009)は、「受容と共感」の姿勢に加えて、支援者側の義務感ではない「楽しみ」が重要となっている、としている。専門家等の、ある立場のもとで子どもの支援を行う場合、どうしても上下関係が生じてしまう。そのような関係性はぬぐい切れないものとも言える。楽しみながら対等な関係で受容、共感を行っていくにはボランティア等の専門性のない第三者による支援という選択肢も多分にあり得る。

また、近年ではインターネット上が居場所になると考えられている。関(2012)は若者の中には居場所の無さからインターネットの掲示板等で居場所を見出そうとする人もいることを報告している。川村・谷口(2013)の調査でも居場所の聴取の中でインターネット・ソーシャルネットワークサービス(SNS)がその一つとして挙げられたことを報告している。このように、居場所とは物理的な空間だけを示すものではないことが注目されている。

ここまで述べてきたように不登校及びその支援と居場所の有無には何らかの関係があると考えられる。不登校期間中において自身にとっての居場所を見つけ、そこで新たな関係の構築や経験が得られると想定される。そうして新たに得られたことがその居場所、不登校の意味づけを肯定的なものにするのではないだろうか。

## 目 的

本研究では、不登校時に通っていた場所での経験が、今現在どのように意味づけがなされているかについて面接法を用いて検討を行う。

## 方 法

### 研究協力者

過去に不登校経験があり、不登校時に家庭以外のある特定の場所に通っていた経験を持つ大学生。

上述の関(2012)や川村・谷口(2013)が述べているように居場所に対する考え方は時代を経るにつれて多様性に富むものとなってきていると言える。インターネット上の掲示板やSNS等のオンライン上に同じ趣味嗜好の人たちが容易に集まることができ、その匿名性から現実の自分よりもより開放的になれる空間、機会が増加していると考えられるが、今回の調査では前述したようなオンライン上の開かれた場所は対象外とした。その理由として、通い詰めた場所及びそこでの体験について五感を総動員して得られた感覚を扱いたいと考えているためである。五感を総動員するということは実際にその場所へ赴き自身の肌で感じることであり、現実場面から抽出した居場所の要素をまた別の場所に反映することにまた意義があると考えたためである。故に対象者はインターネット上ではなく現実の場所でそのような経験を持つ方に限定することとした。

### 調査方法

半構造化面接を用いて行った。得られた語りは後に協力者ごとに事例的な検討を行った。質問項目は下部の表1に記載した。すべての質問が終わった後

Table 1 質問項目

生育歴及び家族構成
いつ頃不登校になったか
不登校になったきっかけ
その当時、自身の不登校という体験についてどう考えていたか
不登校であったときに身を寄せていた場所はどのような場所か
その場所に身を寄せることになったきっかけ
その場所に対して身を寄せる以前に抱いていた印象
その場所に行くときは自分一人か、誰かと一緒に行くか
どんな時にその場所に行くか
その場所ではどのようにふるまい、どのようなことをして過ごしたか
そのなかで親しくなった人はいたか
自分がその場所に身を寄せているなかで、その場所に対して抱いていた印象は変わったか
今でもその場所に行くことはあるか
その場所での経験は今の自分にとってどのようにとらえているか

に、補足があるか確認を行った。そして最後にインタビューについての感想を話してもらい、面接を終了した。

なお、面接開始前に研究内容の説明および研究参加への同意を得るために同意書への記名を求めた。その際の研究説明では研究の目的、研究方法、個人情報情報の取り扱い、研究の参加についての説明を行った。

### 倫理的配慮・安全面について

過去に不登校を経験した方のうち、協力者の安全面を考慮し、不登校経験を安定して話すことができる人に協力を依頼し、今現在は定期的な通院、服薬をしていない方に限定した。不登校中の経験についてインタビューを行うため、もし面接の途中で体調が悪くなったり、身体の不調を訴えたりした場合に

はただちに面接を中止し、担当教員の指導の下しかるべきケアを行うことを伝えた。

## 結 果

不登校経験、その当時通っていた場所での体験、経験について3名に対してインタビューを行った。各事例の提示と考察を事例ごとに行った。事例的に検討を行うこととなったのは、不登校の要因背景は個人によって多岐にわたることが想定されるため、固有のエピソードに焦点を当てるのが不登校に対する深い理解の助けになるという考えに至ったためである。なお、研究協力者の一覧を下部の表2に示した。

また、各事例は研究協力者個人が特定されることを防ぐために一部情報を加工している。

Table 2 研究協力者一覧

研究協力者	性別	年齢	不登校期間	不登校時の居場所
A	男	20 (大学3回生)	中学1年生の11月～2月	自宅近くの運河
B	女	21 (大学4回生)	中学1年生の1月の終わり～3月の終業式	習い事の教室
C	女	20 (大学3回生)	中学1年生の7月～中学卒業直前	保健室 (保健室登校)

### Aさんの事例

Aさん：20歳，大学3回生，男性

家族構成：父，母，Aさん本人

不登校経験期間：中学1年生の11月～2月

Aさんは幼いころから明るく活発で友人も多かったが、中学校に上がってからは明るさがなくなり控えめになった。中学1年の10月から少しずつ学校を休むようになり、11月から2月までの間、不登校となった。

#### 不登校に至るまで

Aさんは保育所から小学生までは周囲から「元気で活発」と言われていたが、3、4年生の頃からは「空気読めない」という評価を受けるようになった。家族関係は母親とはよく一緒に出かけ、父親とは公園で遊ぶことが多かった。小学生時代は週1で水泳、土日にはソフトボールをこなし、保育所時代から友人は多く、自ら友人を作りに行くことができる明るい人物だった。教師との関係も良好で、関わるが多かったとしていた。

しかし、中学に上がってからは「部活が厳しかったり、友達とうまくいってなかった」ことで、10月頃から少しずつ学校を休むようになった。この頃は運動部に所属し、中学1年の冬休みの時に部活動のなかで先輩からの厳しい応対と、一部の友人との関係の悪化、さらに顧問の先生との関係も良くなかったことから部活動を休むことが増えた。部活動を休んでいることについて両親は容認しており、特に責めることはなかった。そうして11月に不登校となった。

#### 不登校当時について

Aさんが実際に不登校となった当時「解放された」と感じていた。Aさんの母親は「無理していかんでええよ」、父親もAさんに直接伝えたわけではないが「無理させることない」と母親に伝えていた。このことから「行かんでええや」という思考に至ることができた、と述べていた。Aさんが不登校である時には塾通いやゲームをよくしていた。Aさんは自身の不登校経験を通じて、「しんどいなら無理してやらんでもいい」、「自分を責めちゃう傾向」から「自分で自分を責めなくなった」と述べていた。

### 「居場所」での体験

不登校である時期にAさんが通っていた場所は「家の近くにある運河」で、そこへは、「朝食べてから、散歩に行く時」に絶対に「一人で」行っていた。運河に「一回ふらっといったときに、そしたら嫌なこととか忘れることができた」と述べており、また、運河のあたりを散歩する時に「友達に会わないかどうかは多少警戒して」いたと述べていた。その場所では、「ちょっと歩いてみたり、ベンチで見たり、水の流れ見たり」していた。その当時のAさんは「このままずっとここにいたいな」と感じており、「水の流れ」に対して「癒し」のイメージを抱いていた。その場に一人で通っていて、その場所の中でも他者との関わりがなかった。Aさんは「むしろいらなかった感じ」、「自分を落ち着いてみたかった」と、一人でいることに意義を見出していたようだった。運河に身を寄せていくなかで、身を寄せる前にその場に対して抱いていた「水泳に行くときの交通手段」という認識から「つらいときにつらいことを忘れられる場所」へと認識が変容していた。今現在ではその場に通うことは「あまりない」とのことで、その理由を「つらいことがなくなった」、「つらいことがあったら他のところに行くようになった」と述べていた。

これらの不登校経験、その運河での体験を踏まえて、「つらいことがあったら、丸投げとまではいかないけど、少しほっぽり出してどっか行ってもええんやって思えた」と述べこの面接を締めくくった。

### Aさんの考察

#### Aさんの不登校の要因とそこで得られたもの

Aさんの不登校は、友人関係のトラブルと部活動における人間関係の悪化が直接的な要因であるとAさん自身は述べていたが、その他にも要因は考えられる。前述の二点をより深く、その構造を考えたとき、Aさん自身の「自分を責めちゃう傾向」が深く関連しているのではないかと考えられる。Aさんは小学校3、4年生の頃から、「空気読めない」という評価を受けていた。対人場面や行動において所謂「空気の読めない」行動をとったことにより他者から否定的な評価を受けることが増え、部活動での叱責も加わり自身をより責め立ててしまうことが前述の二点と組み合わせることによって不適応的になった可能性も考えられる。また、Aさん自身は不登校を経験したことで、「しんどいなら無理してやらんで

もいい」、「自分を責めちゃう傾向」から「自分で自分を責めなくなった」、「つらいことがあったら、丸投げとまではいかないけど、少しほっぽり出してどっか行ってもええんやって思えた」と述べていたが、不登校以前は人とのトラブルやその他トラブルが発生した時に自身にその責任を追及していたところを、不登校途中において自身を「落ち着いて見たかった」という言葉からは以前の自分を責めすぎる傾向をもう一度捉えなおそうとしていたのではないかと考えられる。

#### Aさんにとっての「運河」の意義

Aさんにとっての「運河」という場所は、「つらいときにつらいことを忘れられる場所」であるとしていたが、それ以外にも意義があると考えられる。Aさんは、今現在ではその場に通うことは「あまりない」とし、その理由を「つらいことがなくなった」、「つらいことがあったら他のところに行くようになった」と述べていた。またAさんは今現在では運河へは週一程度でしか行かないともしており、現在、何かつらいことがあった場合にはまた別の手段を用いるようになった。さらに「運河」というものに着目すると、運河は人工的に水の流れを整えたものである。運河即ち「川」について田熊（2008）は、流動性との関りだけでなく、「水を統制できるかどうか」や「世界の分割」という点に着目し、「無意識に対する『意識』」と深く関連しているとしており、また山中（1984）は、「『川』はむろんのこと『水の流れ』であり、しばしば『無意識の流れ』に例えられる」と述べている。そのような安定した水の流れに安定していない自身の内的状態を投影し、流れに身を委ねて自身の安定化を図ったのではないかと考える。このことから、Aさんにとっての運河は、整えられた人工的かつ安定した水の流れに自らの身を委ねることで自身の心的エネルギーの流れや状態を整えるための場であるという側面に加えて、不登校時にその場所へ通うことで自身が安定するまでの「仮の住まい」のような側面があったと考えられる。

### Bさんの事例

Bさん：21歳、大学4回生、女性

家族構成：父母と別居中で、母方の祖母の自宅にて、  
祖母、妹3人、Bさん本人

不登校経験期間：中学一年生の一月の終わり～三月の終業式

Bさんは幼いころから習い事一筋で、小学校時代には突飛な行動をとることがあり、あまり人に強くものを言うことが得意ではなかった。中学生時代に、仲の良い友人のグループからの度重なる「いじり」、無視がきっかけとなり不登校となった。

### 不登校に至るまで

Bさんは、両親、妹と母方の祖母の家で暮らしていた。保育園に通っていたころは引っ越しが多く、最終的に、幼稚園の年長時に現在の実家がある土地に引っ越ししてきた。6歳の頃に習い事を始め、小学校に入学する。小学一年生の秋に学校の所謂文化祭のような地域の行事を習い事の発表会と重なったことで欠席することが多かった。

そしてBさんは「中学の最初は楽しく」過ごしていたが、中学一年の冬休み明けから、その当時いつも一緒にいたグループのメンバーから「イジリみたいな感じ」で教室から出されたりしたことが毎日続いた。トイレに閉じ込められたこともあり、その時は先生と当事者生徒で話し合いの末、謝罪を受けるもその後同級生からの「無視が結構こたえて」学校に行かなくなり、不登校へと至った。

### 不登校当時について

不登校となったときに、Bさんの母親から転校の提案をうけ、学校の先生や両親との相談の結果、転校し親元を離れて生活していくことが決まった。その時Bさんは「親元を離れるってということよりも、中学このまま行けん方がまずい」、「不安はなくて、早く移らなきゃ」、「安心感」といった感覚を抱いたものの同時に「ほかに手があった」とも感じていた。不登校期間中、日中は「墮落した生活」、「ずっとネット」で過ごし、夕方になるにつれて「世間の自分と同じ中一の子から遅れてるんじゃないか」、「このままで大丈夫かな」と感じていた。転校を提案した母親に対しては感謝の念を持っており、「新しい道」を見つめることができたという点で人生において不登校は「必要な時期」であったと語った。

### 「居場所」での体験

Bさんが不登校時に通っていた場所は6歳から通っていた「習い事で使用していた施設」（以下教室）で、その場所へは週に6日通っていた。その教室は、規模が小さいこともあり、「同学年の子」を含む様々な年代の人と仲が良かった。その教室に通う中で、教室の「主催の先生」と親しくなり、Bさん

は、この人物に対して「安心できるというか、めっちゃいい人」と受け止めていた。その先生からの熱意のこもった指導が印象に残っていると、「ここではだれも私を無視しない」、一生懸命に「打ち込んでたら、こんなにも自分に労力と時間を費やしてくれる人がいるんや」と感じる事ができたと述べた。その場所については「自分の中での学校」、家族以外の人がいることから「外とのつながりがそこで唯一保たれていた感じ」と捉えていた。現在では転校によりその場所に立ち寄ることはないとのことであった。

## Bさんの考察

### Bさんの不登校の要因とその時に得られたもの

Bさんの不登校の要因について、Bさん本人は「イジリみたいな感じ」がしつこく続いたこと、周囲の人からの「無視」がこたえたことの二つが挙げられていた。「無視」というテーマはBさんにとって重要なものであると考えられる。Bさんは、不登校である期間も習い事に打ち込んでいたが、その教室では「だれも私を無視しない」という感覚を抱いていた。このことから、Bさんは自身が起こした行動に対して、何らかのレスポンスを欲しており、それは過去の「無視された」、「返事が返ってこなかった」という経験から構築されているのではないかと考えられる。故に教室の先生からの指導によって「自分を見てくれている人どこかにいる」という考えに至ったことが、この後の立ち直る力に繋がったのではないかと考えられる。

### Bさんにとっての「教室」の意義

また、Bさんはその教室を「自分の中での学校みたいな感じ」とし、そう感じた理由を学校と「同じくらいの日数行っていた」ためとしていた。また不登校期間中の「墮落した生活」の中で決まった時間に教室へ通うことは唯一規則正しい生活を送るための手段の一つという側面も考えられる。また、Bさんの通っていた教室では、他の受講生と関わる事ができることから「家から出ないということは家族以外とは話さない」という状況をうちやぶり「外とのつながり」を保つという意義もあると考える。不登校状態で外とのつながりを絶った中において特定の関わりを持ち続けることで、対人スキルの低下を軽減することができる。そうすることで不登校状態でなくなった時に対人場面での困難も軽減

することができるのではないだろうか。そうして習い事に打ち込む中で自分を表現し、自身の存在を認めてくれる他者と関わり「ここではだれも私を無視しない」、「一生懸命」に習い事に「打ち込んでたら、こんなにも自分に労力と時間を費やしてくれる人がいる」という経験から自身の内面を見つめられる場所となったと推測する。

これらのことからBさんにとっての居場所の意義は規則正しさと外とのつながりを保ち続け、対人スキルを維持し高め、次のステージに進みやすくするためのある種「学業以外の面の学校」の側面に加えて関わりながら自身を見つめる中間領域であると考えられる。

## Cさんの事例

Cさん：20歳，大学3回生，女性

家族構成（当時）：母，同居中の男性，Cさん本人

不登校（保健室登校）経験期間：中学一年生の7月  
～中学卒業直前

Cさんは4歳の頃に両親が離婚し父親と兄と暮らしていた。小学3年生からは母のもとで暮らし始めた。小学校時代は周りから「笑顔で頑張り屋さん」と言われる人物だったが、中学生時代に自身がいじめにあったことや、周囲のいじめに嫌気がさし保健室登校を始めた。

### 保健室登校に至るまで

「いつも笑って頑張り屋さん」と言われていたが、Cさんにそのつもりはなく、「両親とか、周りに大人の人が不在の時が多かったんで、私的にはさみしかった」と感じていた。両親の離婚以前の友人関係は、人と関わることが苦手な一人であることが多かった。父方で暮らしているときは「すごく楽しくて、わいわいしていた」が、母方へ移った時に「楽しくないな」と感じ、「内向的」になった。その当時、Cさんの母親は職場の男性と同居しており、その男性と母親に対して戸惑いを覚えていた。小学生高学年では周囲からは「へらへらしていた」と言われていたが、毎日の生活自体は「言うほど楽しくない」と感じていた。

その後、公立中学校に進学したが、中学1年生の時、自身がこれまで築き上げてきた関係に加え、近くの小学校出身の人も入り込みコミュニティが大きくなり、築き上げてきたコミュニティを再度築きな

おすことになった時に「あ、無理や」と感じた。さらにCさんの周囲でいじめが起き、「誰かがいじめられていて、いじめられていた誰かが次の日には誰かをいじめている」という状況にあった。またCさん自身もいじめにあったことで、「何してんのかな」と「冷めた感じ」で見えており自分から周囲と関係を絶った。部活動にも所属していたが人間関係の悪化により退部、それと同時期に保健室登校を始めた。

### 保健室登校及び「居場所」での体験

Cさんが保健室登校をしていた当時の自分について、Cさんは小学生の時の自分とその当時の自分を比較し「あ、自分変わっちゃったなあ」と感じていた。しかし、「自分で保健室登校しようって決めたんじゃなくて、周りの環境とか、いじめられたことが自分の中で挙げられたときに、なんでこんなことしてるんやろう」、「そんな中でも絶対に見返してやろう」、「自分がその状況に置かれてることに悔しいって思ってたし、なんか情けなく」感じていた。保健室を選択した理由について「家庭もうまくいっていない、学校もうまくいっていないということで保健室」と述べていた。

Cさんは保健室登校中に何度か保健室から「脱走」をすることがあった。「脱走」をするときは、どこかを目指して、というよりは「保健室の先生も探しに来る」ため見つからないようにしていた。実際に保健室で過ごしている時は、養護教員と他愛もない話をしたり勉強していた。

保健室に身を寄せる以前には、保健室は「ただただ怪我したら行く」という認識だったが、ある時怪我をして保健室に訪れた際、「いつでもおいで」と声をかけられたことがきっかけで、「来てええんや」ということに加え、その中学校は他にも不登校の生徒が多く、保健室登校をしていた人を見て「こういう使い方してもええんや」と感じていた。保健室に赴く際は一人で、保健室で過ごす中でも新たに友人を作ることはなかった。そのことについて「ただ単に一人になりたかったのかも」と述べ、物理的、精神的に「一人でよかった」としていた。中学3年生の途中から保健室に行く回数が減少したが、その理由について高校入試に向けて意識が高くなったこと、これに加えて「甘えてただけ」と感じたことが大きいとしていた。「甘え」については不登校を経験したクラスメイトと自身を比較し、その子のほうがもっとしんどいし、その子と比較したら私はすごく楽」と感じていた。Cさんは自身の保健室登校期間を

「甘えた期間」としており、「今の自分がないと思う反面、もっと努力していれば、もっといい人生だったんじゃないか」と考えることもあった。だが、「甘えた期間」があったことで「幼いころのままの自分」、「へらへらしたまま終わっていた」自分から人に対する認識が変わったとして、「結局は、良かった」と述べていた。「甘え」の他に不登校に対する世間の受け止め方について周囲の大人から「不登校でもいいんだよー、みたいな考え」を勧められたとき、不登校になることはできるが、そこから「立ち直るのは自分の力があるのに何かその力を失ったままで、不登校としてノビノビと、ぬくぬくという状況になるかもしれない」と考えたときに疑問や「無責任」という考えを持ったとして、受け入れてもらいに行くのではなく、「背中を押してもらいたかった」と語った。

### Cさんの考察

#### Cさんの保健室登校と「退避」の意義

Cさんが保健室登校になった直接的な要因は、中学校入学における「コミュニティの大きな変化」、「周囲にいじめが横行したこと及び自身もいじめにあったこと」が挙げられていた。Cさんの場合は不登校ではなく保健室登校ではあるが、その当時は家庭、学校ともに上手くいっておらず、自身の居場所が無かったためその両者の中間となる「保健室」を選択したと考えられる。保健室登校に関しては様々な研究がなされており、稲田（1996）によると、保健室に身を置くことは「教室からの一時的な退避」であることもあれば、「学校への接近の努力」であるともされている。Cさんは「保健室登校で中学生生活を終わらしているとは思ってなかった」、「今はいったんここにいるけど絶対に戻る」と述べていたことから、後者の「教室からの一時的な退避」という要素が強いと考えられる。またCさんは保健室に行くときは一人で行き、誰かに頼るという要素は見られなかった。このことについて、幼少期の環境が関係していると推測する。幼少期のCさんの周囲には頼れる大人がいる状況が少なく、同居していた男性や母親に戸惑いを感じていたために頼ることが難しくなったと考えられる。

#### 保健室登校を通じて得たもの

Cさんの保健室登校経験において「甘え」の意識は重要な考え方であると推測する。Cさんが「甘

え」という感情を抱いたきっかけは自分と他の不登校経験者と比較した時に「自分は楽な方」と考えたことが挙げられる。Cさんが「甘え」と捉えた背景にはCさんの幼少期の環境が影響を及ぼしていると考えられる。「周りに大人の人がない時が多かった」と語っていることから周囲に頼ることが難しかったのではないかと推測する。そのことから、過剰に人に頼ることや休むことを「甘え」と捉えたのではないだろうか。だが、「甘えた期間」があったおかげで「幼いころのままの自分」から人に対する認識が変わったとして、「結局は、良かった」と受け止めていた。また、「甘えた期間」については後悔の念も持ち合わせていた。このことに加えてCさんは保健室登校を経たことで、幼いころからの考え方から一歩成長した考え方への変容へ至り、両価的な認識を持っていると考える。これらのことから、甘えることができなかった保健室登校前のCさんは保健室登校を経ることで抵抗を覚えつつも甘えることができるようになったと推測する。

### 総合考察

#### 「不登校の要因」の検討

ここまで3人の協力者の不登校経験及び保健室登校経験について、その事例をまとめたものを記載した。今回の研究において協力者の方の不登校、保健室登校を経験した時期が3名共に中学生であった。小学校から中学校への学校間移行における子どもの心理的な適応の困難（白井,2011）を指す「中一ギャップ」に着目する必要があると考えられる。中学校への入学というものは、公立中学校の場合は自身が通っていた小学校のほかに校区内の別の小学校からも様々な人が集まる。その中で、Aさんの部活動での縦社会や友人との関係性の変化、Bさんも友人関係の変化、Cさんの以前までのコミュニティに外部から人が参入することで肥大化に伴い友人関係が変化することが緊張状態につながることを示唆している。中学校にあがると、部活動における先輩—後輩関係、即ち縦社会に触れることも増えるため、慣れない関係性に適応することに負担を感じるということも考えられる。

#### 不登校の意義

不登校というものについて今回の協力者の方々3人全員が自身の不登校経験、保健室登校について肯定的な捉え方をしていた。語りの中からは、不登校

を一つの契機として「つらいことがあったら、丸投げとまではいかないけど、少しほっぽり出してどっか行ってもええんやって思えた」(Aさん)、「自分に労力と時間を費やしてくれる人」の存在を知ったことや「必要な時期」(Bさん)、「幼いころのままの自分」から人に対する認識が変わったとして、「結局は良かった」(Cさん)とそれぞれ述べていたように不登校は彼ら彼女らの人生におけるターニングポイントとなりえたと考えられる。このことから、不登校はある種、人として成長するために必要な自身の在り方を知るために必要な期間となる側面があるという理解が今後の不登校を考えていく上で重要な考え方になるといえるのではないだろうか。

### 不登校における居場所の意義

本研究のもう一つのテーマである、不登校時に通っていた場所については、不登校の要因がその個人によって種々様々であるように、その個人の背景によって、場所に求めるもの、その場所への意味づけは異なってくるということは明らかである。ただ、本研究において語られた内容を見てみると、その共通点として、彼ら彼女らが通っていた場所は、忠井・本間(2006)のいう「その人がなすべき行為や活動ではなく、存在そのものがその場に無理なく定位できるという存在論的な次元に関わるもの」という考え方のもとで、存在自体の価値がまるごと認められる場所であったということが挙げられる。その場所の中であるがままの自分が受け入れられ、安心できる場であるという条件があって初めて自身に焦点を当てることができるようになり、その個人の人生において必要となるあるいは現在不足しているスキルを洞察し発見することにつながると考えられる。Aさんの場合は自分を落ち着かせるという意味合いの「運河」、Bさんは不登校である間に薄れつつあった外部とのつながりを保ち続けるための習い事の「教室」、Cさんはうまくいっていない家庭と教室の間で苦しむ自身の退避場所としての「保健室」など、不登校期間にそういった場所を見つけることで不登校状態である自分に欠けているものを埋め合わせる環境を手に入れ、そこで初めて自分を見つめることができるのではないかと考える。そうして欠けた自己を取り戻してまた外の世界、別の新たな場所へ飛び立っていくことが大きな意義であるのではないだろうか。

## 謝 辞

この度、本論文の作成にあたって京都文教大学臨床心理学部の倉西宏准教授をはじめとする教員の方々にはご多忙の中にも関わらず度重なるご指導、ご尽力を賜ったこと、また協力者の方々には日々ご多忙の中、本研究にご協力いただいたことをこの場を借りて感謝の意を述べさせていただきます。

## 文 献

- 半田一郎(1999). スクールカウンセラーの立場から(子どもの自我・自己の成長と学校心理学), 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 65.
- 稲田正文(1996). 保健室登校の普通名詞化に疑問, 児童青年精神医学とその近接領域, 37, 165-166.
- 石本雄真(2010). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所, カウンセリング研究, 43(1), 72-78.
- 川村竜之介・谷口綾子(2013). まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究, 土木学会論文集, 69(5), 335-344.
- 菊池栄治・永田佳之(2001). 「オルタナティブな学び舎の社会学—教育の〈公共性〉を再考する—」, 教育社会学研究, 68, 65-84.
- 小柴孝子・谷口清(2013). 不登校生徒の内省的語りの質的分析, 日本教育心理学会総会発表論文集, 55, p561.
- 松高由佳(2016). 大学生の不登校に関する要因の研究, 広島文教女子大学心理臨床研究, 7, 1-8.
- 三浦正江(2009). 中学生が学校生活において経験する肯定的出来事に関する検討(3) —出来事の経験とストレス反応, 不登校感情, 自尊感情との関係—, 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 260.
- 文部科学省(2019). 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について (<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>)
- 文殊紀久野・日高順子(1996). 不登校に対するイメージ変容に関する研究, 山梨県立看護大学紀要, 4, 189-96.
- 佐川佳之(2009). 不登校支援における「秘密」の機能, 年報社会学論集, 2009, (22), 222-233.
- 佐川佳之(2010). フリースクール運動における不登校支援の再構成—支援者の感情経験に関する社

- 会学的考察一, 教育社会学研究, 87, 47-62.
- 関由美子 (2012). 女子高生の「居場所」についての研究, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 20, 107-115.
- 鈴木菜生・岡山亜貴恵・大日向純子・佐々木彰・松本直也・黒田真美・荒木章子・高橋悟・東寛 (2017). 不登校と発達障害: 不登校児の背景と転帰に関する検討, 脳と発達, 49(4), 255-259.
- 高橋歩 (2010). 不登校経験への意味づけに関するPAC分析, 日本教育心理学会総会発表論文集, 52, 536.
- 高橋学 (2001). 不登校生徒の友人関係に関する一考察, 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 88.
- 田熊友紀子 (2008). ホイメージからみた心理療法, 日本評論社.
- 忠井俊明・本間友己 (2006). 不登校・ひきこもりと居場所, ミネルヴァ書房, pp2-24.
- 田村光子 (2016). 子供の居場所の機能の検討, 植草学園短期大学紀要, 17, 31-42.
- 臼井博 (2011). 小学校から中学校の学校間移行と学習の動機の発達(5) —小学校中学年の親子交流行動から卒業時の学校適応の予測—, 日本教育心理学会総会発表論文集, 53, 381.
- 山中康裕 (1984). 「風景構成法」事始め, 中井久夫著作集別巻1, H・NAKAI風景構成法, 岩崎学術出版社, 1-36.
- 山中康裕 (2000). 「内閉論」からみた「イニシエーション」, 講座心理療法総編集河合隼雄, 1, 心理療法とイニシエーション, 岩波書店, 63-75.